

# 関西学院大学 研究成果報告

2020年 7月 14日

関西学院 院長殿

所属：文学部  
職名：教授  
氏名：宮下博幸

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国：ドイツ連邦共和国）
研究課題	構文文法の可能性と限界 — ドイツ語の項構造構文の分析
研究実施場所	ドイツ連邦共和国 マインツ大学
研究期間	2019年 3月 1日 ～ 2020年 3月 31日（13 ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究課題では、Goldberg (1995) の提唱する「認知構文文法」の立場に立ち、英語について提案されたこの理論が、英語に比べて形態・統語的に複雑な言語であるドイツ語をどの程度うまく記述できるのかを明らかにし、それによって構文文法の可能性と限界を探るという目標設定の中で、その一部を扱おうとするものであった。研究滞在中は形容詞構文、自動詞移動構文、自動詞構文、再帰移動構文を対象として研究を行った。以下、それぞれの成果について記す。

ドイツ語の感情・感覚形容詞は、*Ich bin krank.*（私は病気だ）のような「主格名詞句＋コピュラ＋形容詞」という構文（主格形容詞構文）と、*Mir ist kalt.*（私は寒い）のような「与格名詞句＋コピュラ＋形容詞」という構文（与格形容詞構文）をとる。本研究では構文文法の立場に立ち、これらの構文の構文パターンに抽象的な意味が認められると仮定して、コーパスの形容詞のデータをもとに、その意味を探った。その結果、与格形容詞構文には「与格名詞句に形容詞で表される状態が自然発生的に起こる」といった意味が想定されることがわかった。また通常与格形容詞構文を取らない形容詞でも、この構文の意味に適合する条件がそろると、与格形容詞構文が出現するという現象も確認された。本研究により、ドイツ語の感情・感覚形容詞構文は、構文文法の立場でうまく説明できることが明らかになった。研究成果は Stauffenburg 社から刊行された論集で公刊した（2020年5月）。

次に自動詞移動構文について研究を行った。自動詞移動構文とは「主格名詞句＋定動詞＋方向句」という形式のものであり、この構文には「主格名詞句が方向句の方向に移動する」とい

う意味が仮定可能である。この構文がどのような動詞と共に起り得るかを調査したところ、主語の移動を表す動詞以外に、*quietschen*（キイキイ鳴る）のような音を表す動詞や、*schlagen*（たたく）のような通常他動詞とされる動詞にも、この構文が現れることが確認できた。音を表す動詞の場合は、「音を出すことによって主格名詞句が方向句の方向に移動する」という意味となる。このような拡張は自動詞移動構文が自立した機能を持っていることを裏付けるものである。また通常他動詞とされる動詞は、その動詞が動きをあらわし、その際に移動物が想定される場合に自動詞移動構文が用いられ、そこでは「主格名詞句が動作を行うことで、想定される移動物が方向句の方向へ移動する」という別の意味が想定可能である。自動詞移動構文は多義的に捉える必要があることが明らかになった。これらの成果はマインツ大学におけるドイツ語学の研究発表会で発表した。また自動詞移動構文は日本語にも相当する構文が存在するため、日本語との比較対照の視点から考察を行った。その結果、日本語では対象に接触しているかどうか対格構文と自動詞移動構文の境界をなしているのに対し、ドイツ語では対象に影響が及んでいるかどうか対格構文と自動詞移動構文との境界となっていることが分かった。以上の研究成果はドイツ語でまとめ、日本独文学会学会誌にて公刊した（2020年5月）。

また自動詞構文についても考察を進めた。自動詞構文は「主格名詞句＋動詞」というものであるが、この構文を構文文法的な意味で捉えるなら、他動詞の目的語の省略現象は、他動詞が自動詞構文に融合したのものとして把握可能である。本研究のような構文文法の視点からの研究はほとんどないものの、他動詞の目的語の省略現象についてはすでに多くの研究があるので、まずそのような研究の内容の整理を行い、それらの内容が本研究の構文文法的な立場で説明可能かどうかを検討した。その結果、自動詞構文の意味として「主格名詞句が動詞で表される動作を行う」「主格名詞句が動詞で表される属性を持っている」という二つの意味を仮定することで、これまでの研究で指摘されてきた自動詞化の際の振る舞いを説明しうることが判明した。この研究成果は滞在中にドレスデンでの国際会議で発表する予定だったが、コロナ禍のため会議が秋に延期となったため、秋に同会議で発表の予定である。

さらに自動詞移動構文と似た意味を表す再帰移動構文についても研究を進めた。この構文は英語の *one's way* 構文と機能的に類似するものの、ドイツ語では様態の解釈が許されにくいとされる。本研究ではその原因について、ドイツ語の再帰移動構文と、英語の *one's way* 構文の比較を中心に分析を行った。その結果、ドイツ語と英語の相違は、手段をどこまで拡張して解釈できるかという点であることがわかった。この研究成果は今秋のドイツ認知言語学会で公表する予定でアブストラクトを送付していたが、この学会も来年に延期となった。発表が採択されたら来年に成果発表を行う予定である。

滞在先のマインツ大学は、今回の滞在中のホストであるマイバウアー教授を中心に、感情などの「表出性」の研究のドイツにおける中心となっているため、この領域でも上の研究課題と並んで研究を進めた。報告者はこれまでドイツ語の「心態詞」と呼ばれる表現の研究を行っており、これまで心態詞が「表出性」の表現、具体的には話し手のある種の感情を表現したり、また聴き手の感情を制御したりする働きを担うものと捉えられるという仮説を提示していた。この仮説に基づき、いくつかの心態詞の機能を感情の観点から考察する可能性について、マインツ大学の研究会で発表し、教授陣から有益なコメントを得ることができた。滞在中には本学の協定校であるレーゲンスブルク大学の一般・比較言語学科のヘルムブレヒト教授から講演を依頼され、「日本語の性・数・格」というテーマの講演を行った。本滞在中にはこのように上で述べた直接の研究課題の遂行以外にも、今後の研究や人的交流に大きく資するものとなったことを付言したい。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学（学院外留学）は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。